

衣笠家良集の古写断簡

日比野 浩 信

衣笠家良の家集の伝本としては、家良の詠の中から後鳥羽院（二十五首）・定家（六十首）・知家（百二十五首）が計二百十首を撰んだ後鳥羽院定家知家入道撰歌と、歌数九百二十三首を収める衣笠前内大臣家良公集との二系統が知られている。

伝本・本文の研究は、その作品の全体像を見通せる完本で行うのが望ましいのはいうまでもない。致し方ない事ではあるが、現存する完本を求めるが故に、その対象は、近世以降の書写本が中心となる場合も少なくない。しかしその一方で、古筆切の中には、現存伝本に比べて格段に書写年代が古い断簡や、現存伝本には見られない歌を含む断簡などもあり、注意が喚起されている。家良の家集もその例に漏れない。

一

伝衣笠家良筆御文庫切は、新撰古筆名葉集の家良の項に「御文庫切 自詠百首有名詠草ナリ哥二行書定家卿加筆点アル処モアリ」として記載されているが、自詠百首ではなく、後鳥羽院定家知家入道撰歌を書写内容とする。もとは卷子本の断簡で、国宝手鑑の藻塩草・見ぬ世の友・大手鑑にも収められているのははじめ、『古筆学大成』には十三葉が掲載されている他、『平成新修古筆資料集』の第一集と第四集などにもみえている。注目すべきことに、この御文庫切には跋文と奥書の部分が残されている。まず、後鳥羽院の召しによって家良詠を撰出して送ったものの返却されず、改めて家良詠六十首を撰出したという、藤原定家の跋文がある。次いで、延応元年（一二三九）七月、定家の求めに応じて自詠を提出し、十

二月に返却された時に、この跋文が備わっていたとする家良の署名入り奥書が記されている。この跋文と奥書によって、後鳥羽院定家知家人道撰歌の定家撰出年代が延応元年、家良が四十八歳の年であることが明らかになったとともに、御文庫切は、後鳥羽院定家知家人道撰歌のうち定家撰歌部分の、家良自身による自筆浄書本の断簡であろうことがうかがわれるわけである。この御文庫切の重要性は改めていうまでもなからう。

また、藤原定家を伝称筆者とする五首切は、国宝大手鑑や、白鶴美術館蔵手鑑・須磨寺塔頭正覚院所蔵古筆貼交屏風などにみえ、『古筆学大成』の八葉の他に、冷泉家時雨亭叢書『古筆切 拾遺(二)』や『古筆の楽しみ』^③『続古筆の楽しみ』^④などにも紹介されている。定家真筆ではなく、定家の側近などによるものとされるが、あるいは時代を下げて、いわゆる「擬定家本」と考えらるべきであろうか。作者名のない書写形態から家集の断簡であり、家良の詠を含むことから家良の家集と認められる。ただし、現在伝わる二種の家集、すなわち後鳥羽院定家知家人道撰歌と衣笠前内大臣家良公集とは別種で、前者の母胎となった家集^⑤であろうと考えられている。

なお、新撰古筆名葉集の定家の項には「五首切 六半歌仙歌二行書」とあり、その直後には「三首切 同品ヲ三首キリタル故ニ云」とある。五首切は六半形の冊子本に一面十行和歌二行書で、和歌五首を書写していることが多く「五首切」、三首切も同一書式ながら、詞書を含むために、一面当たり概ね三首の和歌を書写していることが多いところから「三首切」とされたのであろうが、問題は名葉集に「同品」として扱われている点であろう。名葉集に「歌仙」とされているものはいずれかの家集の場合が多いが、これでは同一書籍のうち、詞書がなくて五首が書写されている箇所と、詞書があるために三首が書写されている箇所としての違いのみで、同一歌人の家集から切り出されたツレであるかのような誤解を免れない。筆者尊重・筆跡鑑賞の立場においてはともかくも、国文学研究の立場からは厳密に区別する必要がある。五首切は概ね家良集、三首切は大式高遠集を書写内容としているようである。ただし、現存伝本とは異系統の当該家良集五首切の場合、こうして書写内容の異なる類似の断簡があること、また、俊成監督書写本や定家監督書写本、真観本・資経本・承

空本や擬定家本などのような、一連の諸家集群が存在することに鑑みると、明らかな家良歌を含む断簡ではない限り、他家集を書写した類切が混在する可能性もあり、家良家集との断定には注意せねばなるまい。

更にもう一種、比較的近年になって見出された家良集の断簡に、伝二条為氏筆切⁶がある。鎌倉後期の書写とされ、金銀の砂子、箔、野毛などを散らした美麗な料紙を用いた、もとは六半形の冊子本の断簡で、後鳥羽院定家知家入道撰歌を書写内容としている。ただし、新編国歌大観や私家集大成の底本となっている宮内庁書陵部蔵本（以下、書陵部本）とは大きく歌順が異なっており、現存本のなかでも静嘉堂文庫蔵本（以下、静嘉堂本）との近似性が指摘されている。

さて、これら古筆切のうち、御文庫切と五首切については稿者も触れたことがあるが、その後⁷に新たに管見に入った家良集切もあり、現存伝本との関わりとして興味深い断簡の新出をもみた。敢えて略述しておきたい。

二

新たに存在が知られた伝藤原定家筆五首切について述べておきたい。

まず、①個人蔵の一葉（図一）で縦十六・六センチ×横十三・五センチ。本文は以下の十行。

ほと、きすやとかりなれしたち花の

はなのさかりといかてつけまし

あやめくさねにあらはる、けふも猶

山ほと、きすなかすもあるかな

あやめくさむすふまくらのかりそめに

としにひとよをなとちきりけむ

ほと、きすなきこそわたれなつき山

しけきおもひや身にあまるらん

いくかへり山ほと、きすまぢわひて

なくねにあかぬとしもへぬらん

「五首切」の名称通り、五首の歌が書写されている。夏部に属する部分であろう。六行目「ちきりけむ」は、一旦「ちきけん」と書いた上から重書。三行目と五行目、すなわち二首目と三首目の右肩に合点を付す。また、写真では確認しづらいが、二首目の歌には墨の合点のすぐ左側に朱の合点もある。朱の合点は、これまでに報告がなかったようである。これら五首のうち、二首目「あやめくさねにあらはるゝ……」の歌が後鳥羽院定家知家入道撰歌の「京極入道中納言撰」のうちに菖蒲ぐさねにあらはるるけふも猶山ほととぎすなかずも有るかな（三七）

とあり、五首目「いくかへり……」の詠が、やはり後鳥羽院定家知家入道撰歌の「大宮三位入道撰」のうちに幾かへり山時鳥まぢわびて鳴くねにあかぬ年も経ぬらむ（一〇七）とある。

家集の断簡五首のうち、二首が現存する家良詠と一致したことで、当該断簡は家良の家集を書写内容としているとみて間違いないだろう。あとの三首は、現時点では他の歌集に見出すことはできないが、家良の新出歌として認められよう。

次の一葉も②個人蔵（図二）で、縦十六・九センチ×横十三・八センチ。本文は以下の十行。

なつふかきたまえにしけるあしのはに
をきてほたるのつゆいそくらむ

みつくらきのさはのあしをふくかせに

かたもさためすとふほたるかな

なつふかきのはらにしけるこはきはら

したはのつゆやむすひそむらん

ひくらしのなくねよりをくゆふつゆに

かついろかはるもりのしたくさ

あか月のつゆはすゝしきみしかよに

あきかせならすをきのをとかな

この断簡にも五首の歌が書写されている。これもまた夏部に該当しよう。四首目「ひくらしの……」の歌が、後鳥羽院定家知家人道撰歌の「大宮三位入道撰」のうちに

日暮しの鳴く音よりおく夕露にかつ色かはる杜の下くさ（九〇）

とあることよって家良詠であり、これを含む該断簡が家良家集を書写していることが認められよう。二首目「みつくらき……」と、五首目「あか月の……」の歌頭に、「○」あるいは「□」ともみえるような符号がある。墨色がやや薄く本文とは異なっているため、後から付されたものかも知れないが、現時点で管見に入ったツレの断簡にはみられない符号である。他の歌集にも見出すことのできない歌に付されており、いかなる意味を持つ符号であるかは明らかではない。ともあれ、五首のうち四首が家良の新出歌である。

以上二葉の伝藤原定家筆五首切は、それぞれに、現存する家良の家集である後鳥羽院定家知家人道撰歌と共通する歌をもつことから、家良家集の書写断簡と認められる。また、それぞれ朱合点や「○」といった、従来報告されていない符号

が付されている点にも注意すべきであろう。更に、合わせて七首の新出家良歌の存在を知ることができたのは意義深い事であり、これら断簡の持つ資料的価値の高さはいままでもなからう。

三

さて、いま一種、従来報告のなかつた家良家集の古筆切が管見に入った。

個人蔵の一片(図三)で二条為氏を伝称筆者とする六半切。書写年代は、鎌倉中期から後期頃と思われる古写断簡である。先述の伝二条為氏筆六半切が装飾料紙を用いており、新出の伝二条為氏六半切は素紙を用いていることから、便宜的に前者を「装飾切」、新出の後者を「素紙切」と仮称する。二種の大きな違いはもちろん料紙であるが、筆跡も同一の伝称筆者を当てるだけのことはあつて類似しているもの、よく見ると異なる。また、装飾切が一面九行であるのに対して、素紙切は一面に八行を書写している。管見に触れた素紙切は縦十五・七センチ×横十五・七センチ。本文は以下の通り。

人のこゝろをたまのをにして

わかれせぬゆふつけ鳥のいかなれは

あか月ことのねにはなくらん

雑

つゆのをくのはらの秋のくさむしろ

ふきしく風はよさむなりけり

ふるさとをとつは山をこえていなは

いと、いくへの雲かはたてか

後鳥羽院定家入道撰歌の二〇七番歌下句から二一〇番歌にあたる。料紙に損傷があり、七行目最下部はかなりかすれてはいるが「は（八）」がある。最終行は「いと、いくへの雲かはたてか」と読める。「か」の後にも墨痕が認められるが、歌句の音数からはもう一文字あったとは考えにくいことであり、墨汚れであろうか。新編国歌大観では次のようにある。

あひみずはよし絶えはてねながらぬ人のこころを玉のをにして（二〇七）

別れせぬ夕つけ鳥のいかなれば暁ごとの音には鳴くらむ（二〇八）

雑

露の置く野原の秋の草蒔ふきしく風はよさむなりけり（二〇九）

故郷をとほつは山を越えていなばいとど幾重の雲かへだてむ（二一〇）

二〇七番歌下句から二〇九番歌までに異同はないが、二一〇番歌には歌句に違いが認められる。

従来知られていなかった種類の鎌倉期書写断簡であり、歌句にも異同がみられ、貴重な断簡の新出ということができよう。

四

さて、家良家集四種類目の、鎌倉期古写断簡の新出を見たわけで、家良の鎌倉期における享受の広さを改めて確認し得たということになるが、実は、この伝為氏筆素紙切は、現存伝本のうち、静嘉堂本のツレであることが明らかである。両者を見比べれば、即座に判る（図四参照）ことではあるし、静嘉堂本で当該箇所が欠脱していることから裏付けられることでもあるが、先行研究を少々補い得る点もあり、今後の資料博搜に示唆するところもあるようなので、検討しておくこととする。

まず、静嘉堂本については、私家集大成に簡潔得要を得た解説があるので、引用しておきたい。

静嘉堂文庫蔵本は、一五・三cm×一五・一cmの鳥の子列帖装一帖で、墨付三〇丁、伝二条為氏筆鎌倉期古写本である。

目録には「衣笠内大臣集」とあるが、外題・内題ともに存しない。本文は「後鳥羽院御撰」から始まっている。書写年時がずば抜けて古い点注意されるが、すでに大きな錯簡を有する伝本を書写したものとおぼしく、底本に比し歌序の錯乱が甚だしく、しかも一〇首の歌を脱している。しかし参考になる点も少なくない。たとえば底本の「定家京極入道中納言撰」とある箇所が、「京極入道中納言撰」、底本の「知家大宮三位入道撰」とある箇所が「大（知家）宮三位入道撰」となっていることを参考にすると、底本の「定家」「知家」の語は、元来は右傍などに付された注記で、それが転写間に本行化したものではなかったかと推測される。

また、新編国歌大観解題¹⁰には、次のようにある。

（前略）伝為氏筆の鎌倉期古写本。書写年時は格段に古く、歌本文なども純良ではあるが、惜しむらくは、すでに甚しい錯簡を有した祖本からの転写本と思しく、歌序の錯乱が甚しく、かつ一〇首の歌を欠脱している（後略）
これらも参考に、概ね、

- ① 現存最古写本であること
- ② 本文に優れた点があること
- ③ 錯簡本を転写したものであること
- ④ 十首の欠脱があること

を、静嘉堂本の特質として掲げることができよう。

更に近時、徳植俊之氏によって全文が翻刻¹¹されるに至り、その中でも静嘉堂本の詳細は述べられている。そこで、この特質①～④に基づいて、新出伝為氏筆素紙切について略述する。

①については、ツレであるので、書写年代を同じくすることは、いうまでもなく、後鳥羽院定家知家入道撰歌の伝本中、格段に古い。ただし、古筆切としては、自筆浄書本の断簡たる御文庫切と、定家側近の手に成るとすれば五首切も鎌倉初

期の書写であり、当該箇所が家良集の最古写断簡とはいえないところに、古筆資料の奥深さを垣間見るようである。

②の本文について、徳植氏は、静嘉堂本と書陵部の異同を具体的に九箇所あげ、「明らかに静嘉堂本の方が優れている」「静嘉堂本は書陵部本の誤りや不審箇所を訂正し、本文としては静嘉堂本の方が優れているといえよう」と結論付けておられる。⁽¹²⁾ただ、先述のように、素紙切と書陵部本では卷末二一〇番歌の第五句に大きな異同がある。今一度掲出しておくと、

(素紙切) ふるさとをとをつは山をこえていなはいと、いくへの雲か^はた^てて^か

(書陵部本) 故郷を とほつは山を越えていなばいとど幾重の雲か^へだ^てて^む

断簡の末尾に墨痕があるようにみえるが、ここでは、第五句を「雲か^はた^てて^か」と考えておく。解釈を試みるに、真意をとらえづらいところもあるが、故郷を遠く離れ遙か遠く連山の端を越えて行くと、そこはますます何重にも重なった……というところまでは、概ね一致していよう。

書陵部本の「雲か^へだ^てて^む」は「何重もの雲が(更に行方を)隔てているのであろうか」とでもなりそうであるが、明快ではない。明言はできないが「雲や^へだ^てて^む」の方が和歌としては通りがよいように思われる。よもや「雲か^へだ^てて^む」ではなからう。

断簡の第五句に関わる「雲のはたて」は平安後期から鎌倉期の歌学書の中で取り沙汰されるような難解語であるが、ここでは「遠つ端山を越えてい」くところからも、「果て」ととらえるべきであろう。また「雲か^果て^か」「雲か^果て^か」のどちらとも読めそうであるが、「雲」と「果て」を並列的に掲げてそのいずれかか疑問視するとすれば、「そこには何重にも重なった雲(がまだ続くの)か、それとも、そこは雲の際涯なのであろうか」となるうか。また、「雲か^果て^か」とすれば「そこは何重にも重なった、雲の際涯であろうか」とでもなるうか。いずれにせよ、ここからみえる風景の遙か先に眺望を馳せる深遠な歌となつて、書陵部本の「雲か^へだ^てて^む」に比べると見どころのある歌句といえようか。いずれにせよ、素紙切、すなわち静嘉堂本の本文の優良性が否定されるものではない。

③の錯簡については、たとえば、四丁表が二一番歌から二四番歌上句まで、四丁裏は一八八番歌下句から一九二番歌上句までというように、丁の表から裏に掛けてさえ錯簡がみられるところから、静嘉堂本の綴じ誤りなどによって生じたものではなく、その親本以前の錯簡が踏襲されたものであることは明らかである。しかし、幸いなことに、一面毎の歌句の連続性は保たれており、静嘉堂本は親本以前の錯簡本を改丁・行詰めに至るまで再現したものであることが判る。ただし、現状においては徳植氏の指摘にもあるように、所々不自然な欠行がある。この点は④十首の欠落とも、また、古筆切としての素紙切の残存状況にも関わる。まず、徳植氏が指摘する、以下の四箇所を掲出する。(一)内に徳植氏の翻刻での注記を示す。

ア 九丁裏八四番歌の後(二行分スリ消シタ跡アリ)

イ 十五丁裏一三六番歌の後(二行空白)

ウ 二十丁表一二七番歌の後(一字分スリ消シタ跡アリ。「春」ト書カレテイタカ)

エ 二十七丁裏九四番歌の後(一字分スリ消シノ跡アリ。薄ク「恋」ノ字ガ残ル)

アは八五番歌「郭公声まつころや山がつの わさ田のさなへうゑはじむらん」の上句が記されていたはずであり、本来、次にその下句があったはずである。しかし、錯簡故に八五番歌の上句に、下句から始まる別丁がうまく対応しておらず、半端な上句を消去することで一首を無かったことにしてしまったことになる。

①の一三六番歌の次の一三七番歌は二六丁表の一行目がその上句に当たる。途中欠行部分には一三七番歌の題「恋」があったであろうことは容易に推定できる。痕跡が明白ではないが、おそらく「スリ消シ」などがなされたとみてよからう。④⑤も徳植氏の述べるとおりで、それぞれ、錯簡により対応する歌を失った一二八番歌の題「春」、九五番歌の題「恋」が消去されている。これらは皆、各面の最終行に当たり、次行への繋がりに不具合のある箇所ばかりである。

また、もう一箇所、三十二丁表の一行目、一九六番歌の前にも欠行がある(オとする)。当該本は一面あたり八行書であるが、この丁は七行しか無く、綴じ目側の空白が明らかに広い。本来、ここに一九六番歌の題「恋」があったのであり、

④同様、痕跡は明白ではないが、擦り消されたものと考えてよいのではなからうか。これもやはり、前行からの繋がり不具合を解消しようとしたものであろう。

これら⑦から⑩の欠行は、全て錯簡によって生じた句の繋がり不具合、題の矛盾などを消し去ろうとした、いわば「辻褃合わせ」の痕跡とみてよいのではなからうか。錯簡を承知した上で、題と和歌を整合させようとしたらしいのである。⁽¹³⁾

あるいは、上句・下句を組み合わせて和歌としての形態を整えるために、綴じ直しなども行われていたのかも知れない。実は、素紙切の出現により、静嘉堂本には、少なくとも何らかの改装が成されていると思しいことが判つたのである。

というのも、素紙切と静嘉堂本を比べると、一般的に考えられるであろう、残欠本・欠落本とそこから切り出された古筆切の間で見られる現象としては、奇妙な事態が起こっている。大抵の場合、書籍から切り出された断簡が元の書籍よりも大きくなることは、物理的にあり得ない。表裏の剥離、裏打ち、化粧裁ちなどを経て、書籍としての大きさよりも小さくなるのが、より一般的な現象であらう。しかし、静嘉堂本が縦十五・三センチ×横十五・一センチであるのに対して、素紙切は縦十五・七センチ×横十五・七センチと、切り出された古筆切のほうが四ミリ乃至六ミリ程大きいのである。つまり、静嘉堂本は、古筆切となった丁を抜き出した後で改装がなされ、裁断されて大きさが変化しているわけである。

もう一点、全くの見当違いかも知れないが、注記しておきたい。静嘉堂本は四折十六紙から成る綴葉装であるが、そのほとんどのノドの部分、すなわち綴じ目側に幅四〜五ミリ程度のテープ状の薄葉が貼られている。紙を折って、その折り目を水で濡らして裂き切り、繊維を上手く結合させることで継ぎ目がほとんど判らないほどの呼継が可能であると聞く。先述三十一丁表・一行目の欠脱部分についても、仮に一行目があったものと想定すると、他丁に比べ、綴じ目側の余白が極端に狭くなってしまふところから、料紙綴じ目側においても、何らかの「操作」が皆無ではない可能性を感じるのである。料紙の綴じ目の重なりを開くようにせねば精査することが出来ず、それが憚られたため、見える範囲での印象であり、そこに切断痕を確認し得たわけではないが、綴じ目に貼られたテープ状の薄葉が単なる補強であるのか、あるいは、錯簡の

整合化で丁を切断して入れ替えた為に付されたものか、今後の補修等の際には是非精査されたい。

さて、④の、十首の欠脱とは、八五・一六六・一六七・一六八・二〇〇・二〇一・二〇二・二〇八・二〇九・二一〇の歌を指すのである⁽¹³⁾(うち、一六六・二〇九は題も含む)。但し、このうち八五番歌については、先述の通り、九丁裏の最終行に上句が残っていたにも関わらず、擦り消された結果であり、元来の欠落ではなく、静嘉堂本における意識的な消去である。ただし、当該歌は定家の撰歌六十首の末尾である。静嘉堂本の現状では丁の裏側に位置しているが、次の知家撰歌は改丁され、次丁の一行目から書写し始められている⁽¹⁵⁾ことから、どこかに八五番歌の下句一行のみを書写した面が存していたはずなのである。また、他の欠落箇所は、一面八行和歌二行書の書写形式に当てはめてみると、錯簡本のため、順序は不明ながら、次の四面分に相当していたことが判る。

a	八五 下句 (定家撰歌の 末尾であり、 以下、空白)																					
b	<table border="1"> <tr><td>一六六</td><td>上句</td><td>題</td></tr> <tr><td>一六六</td><td>下句</td><td></td></tr> <tr><td>一六七</td><td>上句</td><td></td></tr> <tr><td>一六七</td><td>下句</td><td></td></tr> <tr><td>一六八</td><td>上句</td><td></td></tr> <tr><td>一六八</td><td>下句</td><td></td></tr> <tr><td>一六九</td><td>上句</td><td></td></tr> </table>	一六六	上句	題	一六六	下句		一六七	上句		一六七	下句		一六八	上句		一六八	下句		一六九	上句	
一六六	上句	題																				
一六六	下句																					
一六七	上句																					
一六七	下句																					
一六八	上句																					
一六八	下句																					
一六九	上句																					
c	<table border="1"> <tr><td>一九九</td><td>下句</td></tr> <tr><td>二〇〇</td><td>上句</td></tr> <tr><td>二〇〇</td><td>下句</td></tr> <tr><td>二〇一</td><td>上句</td></tr> <tr><td>二〇一</td><td>下句</td></tr> <tr><td>二〇二</td><td>上句</td></tr> <tr><td>二〇二</td><td>下句</td></tr> <tr><td>二〇三</td><td>上句</td></tr> </table>	一九九	下句	二〇〇	上句	二〇〇	下句	二〇一	上句	二〇一	下句	二〇二	上句	二〇二	下句	二〇三	上句					
一九九	下句																					
二〇〇	上句																					
二〇〇	下句																					
二〇一	上句																					
二〇一	下句																					
二〇二	上句																					
二〇二	下句																					
二〇三	上句																					
d (新出素紙切)	<table border="1"> <tr><td>二〇七</td><td>下句</td><td>題</td></tr> <tr><td>二〇八</td><td>上句</td><td></td></tr> <tr><td>二〇八</td><td>下句</td><td></td></tr> <tr><td>二〇九</td><td>上句</td><td></td></tr> <tr><td>二〇九</td><td>下句</td><td></td></tr> <tr><td>二一〇</td><td>上句</td><td></td></tr> <tr><td>二一〇</td><td>下句</td><td></td></tr> </table>	二〇七	下句	題	二〇八	上句		二〇八	下句		二〇九	上句		二〇九	下句		二一〇	上句		二一〇	下句	
二〇七	下句	題																				
二〇八	上句																					
二〇八	下句																					
二〇九	上句																					
二〇九	下句																					
二一〇	上句																					
二一〇	下句																					

つまり、静嘉堂本における本文の欠落は、前述㉗㉘の意識的に消去されたであろう歌題四行と半端な上句一行の他は、下句のみ一行の一面と、各一面に書写された三箇所を連続したまとまりであった。この四面が丁度、綴葉装の一紙二丁四

面分であり、これらが静嘉堂本から抜き出されて、二枚に裁断、更に表裏に剥離されて古筆切とされた。¹⁶ そして、そのうちの一面が、今回出現した伝二条為氏筆素紙切であったと推察できよう。こうしてみると、静嘉堂本は、書写当初、錯簡本ではありながら、本文そのものは完備した完本であった可能性が高いのである。

ともあれ、この度出現した伝二条為氏筆素紙切は、静嘉堂文庫本から切り離された一紙二丁四面のうちの一面であり、残り三面の存在が（現存するか否かは別として）想定できるわけである。

以上のことから、静嘉堂文庫本は、錯簡欠脱本を書写したのではなく、錯簡のある完本を書写したものであり、後に一紙二丁四面が切り離されたことと、「辻褃合わせ」のために題と半端な上句のみの五行が消去されたために欠脱を生じ、更に改装を施されて現状に至ったと推測できるのではなからうか。歌の欠脱は、親本を踏襲したのではなく、静嘉堂本において起こった現象だったのである。

少しく希望的な観測を述べれば、こうして静嘉堂本の欠落部分が古筆切として出現したことで、あと三分の伝存が皆無とはいえないことが判ったわけで、それらが出現すれば、現存最古写本であり、本文の優れた当該本がほぼ（擦り消された八五番歌上句は無念ながら、歌題は容易であろう）復元が可能となるのである。

また、八五番歌下句のみの一面は、わずか一行とて剥離されずに他二面の裏側として残存している可能性もあり、手鑑などに貼られての伝存が確認できた場合でも、その裏側の残存本文の有無確認にも注意を喚起しておきたい。

五

以上、家良家集の断簡二種三葉について述べた。

伝藤原定家筆五首切二葉は、それぞれに後鳥羽院定家家人道撰歌にも入集する歌を持つことから、家良の家集に間違いない断簡であり、七首の新出家良詠の存在が認められた。他には確認できていない朱合点や「○」の符号などにも注意

すべきであろう。

また、伝二条為氏筆素紙切は、現存伝本のうち最古写本で優良な本文を有しながら錯簡・欠脱があるとされる静嘉堂本から切り離された断簡であり、静嘉堂本の欠脱十首のうちの三首を補い得るものである。また、現存流布本と比べ、本文に異同が見受けられ、解釈に一石を投じるものといえよう。当該断簡の出現は、他の欠落箇所存在を示唆するものとしても意義深いことが認められよう。

新勅撰集以下の勅撰集に百十八首が入集する衣笠家良は、続古今集の撰者ともなった歌人でありながら、現在では大きく取り扱われることが少ないように思われる。しかし、自筆本の断簡や装飾料紙を用いた断簡を含む、四種もの鎌倉期書写本や古筆切が伝存しているというのは、家良がそれなりに重要視された歌人であったことの裏付けともいえるのであり、家良という歌人の作歌活動やその享受を考える上で大変興味深いことである。

注

- (1) 田中登氏『平成新修古筆資料集』第一集（平成十二年 思文閣出版）同第四集（平成二十年 同）
- (2) 冷泉家時雨亭叢書『古筆切 拾遺（二）』（平成二十一年二月 朝日新聞社）
- (3) 田中氏『古筆の楽しみ』（平成二十七年 武蔵野書院）
- (4) 田中氏『続古筆の楽しみ』（平成二十九年 武蔵野書院）
- (5) 久保木哲夫氏『うたと文献学』平成二十五年 笠間書院）
- (6) 藤井隆氏・田中氏『続々国文学古筆切入門』（平成四年 和泉書院）及び、徳植俊之氏「新出の伝二条為氏筆六半切と静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』」（『立教大学国文』第四十六号 平成二十九年三月）に紹介がある。
- (7) 鶴田大氏・日比野『歌びと達の競演 諸家集・歌合断簡集成』（平成二十六年 青簡舎）
- (8) 和歌の引用は『新編国歌大観』に拠った。

(9) 解題は樋口芳麻呂氏。

(10) 解題は佐藤恒雄氏。

(11) 徳植氏「静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』―翻刻と紹介―」(『大東文化大紀要』第五十六号 平成三十年三月)

(12) 徳植氏の掲出以外にも、一五六番歌が静嘉堂本では

ちらはなをおしますはあらしさくら花みなはるなからとしはくるとも

とあり初句を「ちらはなを」(散らばなほ)とするが、書陵部本では「散はなを」(私家集大成)では「散はなを」、『新編国歌大観』では「散るはなを」に翻刻)とする。

(13) ちなみに、静嘉堂本の前半では、改丁に際して、別々の歌であっても、上句、下句を組み合わせて一首の歌としての整合性を持たせており、後半に至って「片割れ」がみられるようになるのは、カバーしきれなくなった為である。

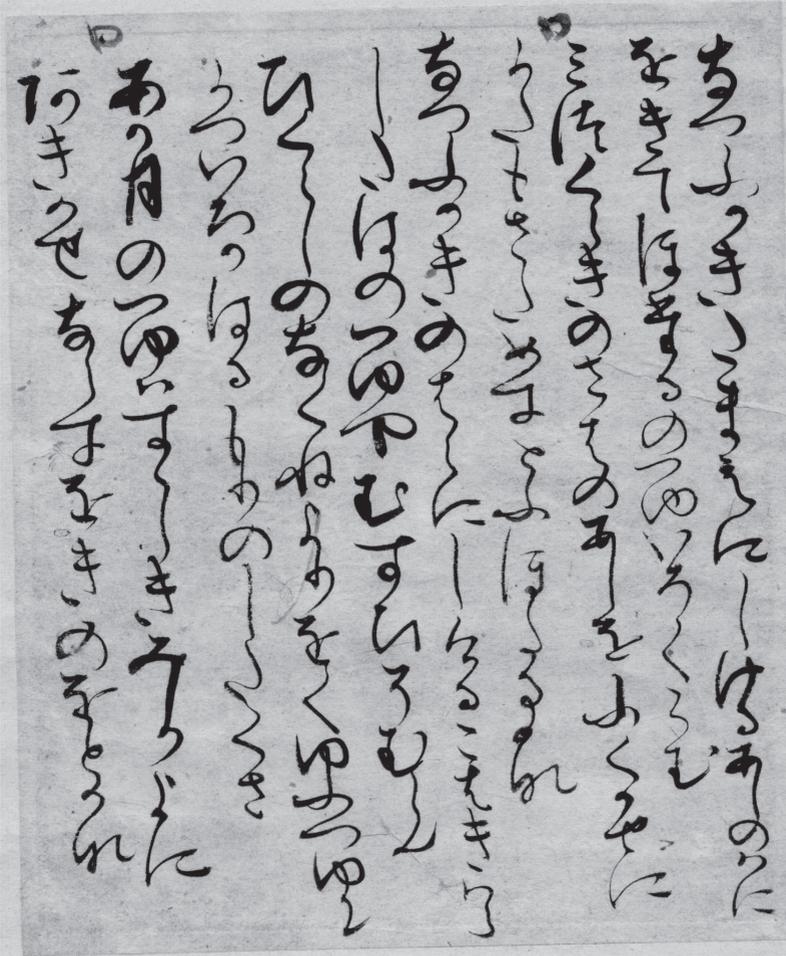
(14) 徳植氏は、「全体の歌数に関しては、書陵部本の七七下句から八五上句まで、一六六から一六九上句まで、一九九下句から二〇三上句まで、二〇七下句から二一〇までの四カ所の歌本文を欠いており」とされる(傍線…稿者)が、「七七下句から八五上句」とあるが、「七七下句から八四下句」は八丁表裏として存在しており、「八五上句」が「スリ消シ」されている。

(15) 後鳥羽院・定家の撰歌も丁の一行目から始められている。また、後鳥羽院撰歌の末尾も四行が記されるのみで、あとは空白となっているが、定家撰歌・知家撰歌の末尾が欠落する該本において、この面が現状の最末尾(三十一丁裏)に位置しているのは、この面こそが一書の末尾に相応しいものとして、意識的に位置せしめられたものと推察できよう。

(16) 当該切には、初代朝倉茂入の極札が付されている。茂入の生没年は未詳ながら、古筆家初代了佐(一五七二―一六六二)の門人であり、江戸時代初期の人。これ以前に古筆切と成ったことになる。

閲覧・調査及び、図版の使用をご許可された静嘉堂文庫に衷心より御礼申し上げます。

(図二) 伝藤原定家筆 五首切②



あつちのうらみはなほあつちのうらみ
あつちのうらみはなほあつちのうらみ
あつちのうらみはなほあつちのうらみ
あつちのうらみはなほあつちのうらみ
あつちのうらみはなほあつちのうらみ

(图三) 伝一条為氏筆 素紙切

人ひこゝろをなほのそとにて
わなまねしよじまきのつみか
あつ月ころのわふにあし
紙
いゆのそとつれぬりきり
ふましくぬるあしあし
しよじまきのつみか
いゆのそとつれぬりきり

何れもまは人の心をもあかり
いほりいほりのうらなはむ
さむらひのうらなはむ
さむらひのうらなはむ

報

おもしろいことなれば
うらなはむのうらなはむ

春